

「胃癌の構造」

中村 恭一 筑波大学教授 著

山口大学教授・第1内科

竹 本 忠 良

私の本を読む習性には、相当の偏向がある。その1つとして、ときどきある著者の本を何冊かまとめておいて、一定の期間読みふけることがある。例えばといって、医学以外の本を挙げることはいささか気がひけるが、宗教史家の山折哲雄教授の著書では、「霊と肉」（東京大学出版会）、「日本人の靈魂観」（河出書房新社）、「宗教的人間」（法蔵館）、「地獄と浄土」（春秋社）、「日本人の心情」（NHKブックス）と、5冊の本をまとめて読みあげた。ごく最近のことである。こうした読書作業をするきっかけには、その著者の著作物のどれか1冊の本が魅力的であったということが多い。したがって、再読の本も、少なからず混じることになる。

中村恭一教授の著書、論文にしても、上記のような作業をして、何日か、まとまった時間を全部あてたことがある。そこへ、「胃癌の構造」の書評である。思わず、むしゃぶりとくようにして読みふけた。

一言でいえば、この本は消化器病学を学ぶもののすべてにとつて、待望の“畢生の名著”である。このすぐれた本を刊行してくれた医学書院にもお礼を言いたい。つまり、この本は、中村教授が常に類推的な思考

を排除しながら、長年月にわたる早期胃癌病変の鋭い観察と洞察をへて、はじめて生まれたものである。著者のまれにみるすぐれた知性によって、ある意味では、袋小路に追い込まれていた胃癌の病理学的研究は、この本によって、われわれ臨床家に対しても、明るい門戸をひらき、高かった閾値をのりこえて、明確な指針を示してくれた、ということができる。

この本を読むことによって、1冊の専門書をすみずみまで読み通すことによって得られる知的興奮を、それこそ久方振りに味わうことができた。著者の胃癌を覬る眼力の鋭さ、確かさ、そして論理の展開のみごとさに、本当に圧倒されてしまった次第である。胃癌の病理専門書としても、いままでの豊かな学問的遺産を整理・統合し、理論的に諸学説の系譜をたどって、本を書くというやり方もあるわけであるが、著者の創造性は、文献の羅列と、たんなる咀嚼、消化を許さないのである。山折流に言えば、著者は胃癌の基礎的鉅脈に対して、極めて鮮明な思想的意味づけさえ一貫して行ってきた人である。しかも、著者の書く文章は、たんたんとしていて、味が濃く、言葉に酔っていない。

なお、これも名著として、洛陽の紙価を高めた「胃癌の病理—微小癌と組織発生」（金芳堂）が刊行されたのが1972年である。和辻哲郎は「続日本精神史研究」の序言に“およそ物必ず十年に変わる物なり”という山鹿素行の言葉を引用しているが、1982年の「胃癌の構造」の刊行は、この10年間の著者の精根を傾けた研究の成果を世に問うものであり、そのことは日本癌病理学のピラミッドとして永遠に記憶される業績の蓄積のすごさを示すものである。

この本の「序」に、菅野晴夫癌研所長は“本書は明治38年（1905）東京本郷の半田屋医籍商店より出版された山極勝三郎先生の『胃癌発生論』以来の名著である。本書はヒト胃癌に関する最も重要な成書として長く歴史に残ることになるであろうことは疑いない”と述べているが、この推薦の言葉に毫もいつわりはない。山折の「日本人の心情」などに、道元の「正法眼蔵」にある“一顆明珠”（一個の光り輝く珠玉）の説明があるが、道元が言った全宇宙を表現したこの“一顆明珠”という言葉をも、本書に捧げたい。

B 5 判 266 頁 図 72 写真 172
原色図 10 1982 年 ￥ 11,000 円 350

医学書院 刊